

<研究名称>

急性期脳卒中患者における退院時の認知機能障害および日常生活活動能力に対する意識障害の影響

<実施責任者及び実施担当者>

所 属 リハビリテーション科

職 名 作業療法士

氏 名 松本幸樹

<研究期間>

サンプル数は200例としており、その収集が終了した時点で終了する

<診療・研究の目的>

急性期病院では在院日数の短縮が求められており、作業療法士は患者の心身機能や活動、参加、個人環境因子を総合的に評価し、発症後早期に転帰先を判断し、多職種に情報を提供する必要がある。先行研究において、急性期脳卒中患者における転帰先に関連する要因は、心身機能における認知機能障害、活動や参加における日常生活活動能力（Activity of daily living:ADL）能力などが報告されている。急性期脳卒中患者に頻発する意識障害は、患者の認知機能やADL能力をマスキ、これらを低下させてしまうが、意識障害の回復とともに認知機能とADL能力も回復を示す。しかし、入院時点では、退院時までに意識障害の回復とともに認知機能とADL能力が回復する患者かどうかはわかりにくく、転帰先の判断が難しい現状がある。そのため、認知機能とADL能力の回復に影響する初期の要因を、意識障害を中心に明らかにできれば、転帰先を判断する一助となる。そこで、本研究は脳卒中患者における急性期病院退院時の認知機能や日常生活活動能力に影響する初期の要因を意識障害との関連性と併せて検討することを目的とした。

<実施内容（方法）>

本研究では、基本情報として、診断名、年齢、性別、入院期間、脳卒中タイプ、責任病巣部位、転帰先の情報を診療録より得る。また、評価指標としては、認知機能評価にはMMSE-J精神状態短時間検査-改訂日本版を、ADL評価にはBarthel Index（BI）を、脳卒中重症度評価には、National Institute of Health Stroke Scale（NIHSS）を、意識障害評価にはJapan coma scale（JCS）を用いて評価した結果を診療録より得る。なお、これらの評価は通常業務の中で既に評価されるため、本研究のために追加で実施される評価はない。

解析は、脳卒中タイプや障害部位等と意識障害との関連性について検討する。これを踏

まえて、退院時の認知機能や ADL 能力に影響する因子について、意識障害を中心に検討する。

<危険性（副作用）等>

本研究は、通常の作業療法業務において既に取得された評価データを取り扱うため、危険性はない。なお、本研究実施中および終了後に、対象者との間で何らかの問題が生じた場合には、速やかに旭川赤十字病院院長および弘前大学保健学研究科長に報告する。

<倫理上問題になると考えられる事項>

本研究は、既に取得された評価データを取り扱うため、問題になると考えられるものはない

<問い合わせ先>

当研究に自分の試料・情報利用を停止する場合等のお問い合わせ
〒070-8530

旭川市曙1条1丁目1番1号

旭川赤十字病院 リハビリテーション科 松本 幸樹

TEL 0166-22-8111

FAX 0166-24-4648